

縄文時代甕棺の基礎的研究・1

渡 辺 誠

1 甕棺への視角

甕棺といえども諸埋葬形態の一姿態にすぎぬ。埋葬体系の全般的研究のなかにおいてのみ、正当な位置づけが行なわれねばならない。この自明なことを再認識せねばならぬのが、昨今の縄文研究であるらしい。

甕棺研究のみが先行するには、確かにそれなりの理由はあったであろう。人骨の検出が貝塚や洞穴遺跡に限定されているのに対し、甕棺の場合には人骨が残らなくとも容器としての棺は確かめられること、また特に九州においては弥生時代甕棺との関係が問題にされている、という課題に迫られていたこと、などが指摘されよう。

しかしこれらの理由に大きな意味を見い出すとしても、最初に述べた研究態度は相変わらず堅持されねばならない。たとえば前者に関して言えば、人骨が残らないだけ資料的に不備であり、全埋葬のほんの一部分しか認識し得ていないことを卒直に認めておく必要がある。後者についてはなおさらのことで、甕棺の全埋葬体系のなかで占める位置を解明し、その体系自体を比較することが、二つの文化を比較する上での(それを連続的にみるにせよ、断続的にみるにせよ)正道であると私考する。

そこで具体的に、基礎的事実認識として何が問題にされるべきなのかを、次の諸点にしばって考えてみたい。

1. 甕棺中埋葬人骨の年令と性別。
2. 甕棺の形態と法量。
3. 遺体の甕棺中でのあり方。
4. 甕棺の埋設位置とあり方。
5. 他の埋葬形態との関係。
6. その時期的・地理的分布。

そしてこれらは相互に密接な関係をもって存在しているのであり、これらを有機的に結びつけているものこそ、各遺跡ないし地域社会における埋葬体系であり、社会的伝統である。

こうした観点より従来の研究のあり方をみた場合、基礎的資料の整備が十分に行なわれていたとはみられない。本稿の目的は、遅ればせながらこの基礎的資料の整備を行なうことにある。その資料も、明らかに人骨の遺存していたものに限定し、現時点において明らかにされている事実と未解明の問題を峻別し、昨今の縄文時代における甕棺研究のあり方に、若干の批判を行なうつもりである。

2 人骨出土甕棺の集成

縄文時代の甕棺のうち、先に述べた目的に沿って、人骨出土のみられる例のみを、まず北から順

に列挙しよう。年齢について人類学者による調査の行なわれているものと、未調査ないし考古学者の推定によるものとを区別し、後者についてはカッコを付す。

1. 青森県南津軽郡浪岡町天狗岱遺跡（後期） 十腰内I式土器使用の甕棺2例のうち、人骨のみられたのは1号のみで、（成人）の頭蓋骨・大腿骨等が収納されていた（笠井1918）。
2. 青森市久栗坂山野峠遺跡（後期） 十腰内I式の甕棺12基のうち5基に、（成人）の頭蓋骨・大腿骨等の諸骨がみられた（喜田1934、江坂1968）。
3. 青森市駒込字月見野遺跡（後期） 人骨出土の記録があるのみで詳細不明（江坂1968）。
4. 青森県南津軽郡平賀町堀合遺跡（後期） 十腰内I式の甕棺中に、成人男性の頭蓋骨がみられた（小片他1971）。
5. 青森県上北郡六カ所村表館遺跡（後期） 十腰内I式の甕棺中に、18～19才の女性1体分の骨がみられた（小片他1971）。
6. 青森県八戸市蟹沢遺跡（前期） 円筒下層D式土器の甕棺中に、（胎児骨）がみられた（江坂他1958）
7. 青森県三戸郡名川町平貝塚（晩期） 大洞C1式土器使用の甕棺中に、（幼児骨）がみられた（江坂1960）。
8. 岩手県二戸郡福岡町金田一川遺跡（晩期） 亀沢盤氏（1958）の報告した大洞A式土器使用の甕棺中人骨は、（成人骨）と記されているが、江坂輝弥氏は地主等の発見時の話を総合して、（幼児骨）らしいという。
9. 岩手県大船渡市大洞貝塚（晩期） 長谷部言人氏によって、人骨を認めた6例の甕棺が報告されている。いずれも大洞B式土器を使用。1（A地点1号）人骨は、10カ月死産児、2（同2号）は9カ月死産児、3（B地点2号）は9カ月死産児、4（同5号）は初生児、5（同9号）は9カ月死産児、6（同10号）は8カ月死産児である（長谷部1925、同1927）。
10. 岩手県大船渡市細浦貝塚（時期？） 大串菊太郎1920に、「一昨年本山氏が細浦において、幼児骨を伴う甕棺1基を発掘した」とあるのみで、詳細不明。
11. 岩手県陸前高田市中沢浜貝塚（時期？） 野中完一氏によって記録された本例は、縄文時代甕棺では最も古く調査されたものである。収納人骨は「小児骨下顎には第1乳大臼歯が丁度現われたばかりである」（小金井1923）。また1924年には小田島禄郎氏による発見もあり、人骨は長谷部言人氏は10カ月位と報告された（長谷部1927）。
12. 宮城県石巻市沼津貝塚（時期？） 毛利・遠藤両氏が発掘した甕棺中出土人骨3体が、長谷部言人氏によって報告されている。1は8カ月、2は10カ月（または9カ月）、3は8カ月（または7カ月）である（長谷部1927）。
13. 福島県相馬郡駒ヶ嶺村三貫地貝塚（時期） 坂詰秀一1961に、「昭和27年、日本考古学協会縄文文化編年特別委員会の発掘調査の折、乳幼児が収納されていた2例の甕棺が発見されている」と記されている。
14. 茨城県稲敷郡東村福田貝塚（後期） 堀之内I式土器を使用した甕棺中に、（幼児骨）がみ

- られた（渡辺・片岡1972）。
15. 茨城県筑波郡伊奈村東栗山貝塚（後期） 堀之内式土器を使用した甕棺中に、（幼児骨）がみられた（角田1939）。
 16. 千葉県木更津市祇園貝塚（後期） 2例ある。第1は1956年の発掘によるもので、「堀之内式の甕棺に入れられた幼児骨1体」、と『貝塚』55号（1956）の考古だより欄に記されている。第2は1969～70年の発掘によるもので、同じく堀之内式土器を使用し、（幼児骨）がみられた（平野他1970）。
 17. 千葉県千葉市六道貝塚（後期） 「小児又は胎児の単甕棺葬」出土例列举中に遺跡名があり（1959）。
堀之内式と記されている（伊藤16）
 18. 千葉県千葉市築地台貝塚（後期） 「堀之内式のものの大形甕形土器の中に幼児骨があり、屈葬の姿勢をなしていた」（久保1955）。
 19. 千葉県千葉市矢作貝塚（後期） 堀之内I式の（小児）甕棺が1例出土している。（武田1938）。
 20. 千葉県千葉市台門貝塚（後期） 堀之内式の（幼児）甕棺が1例出土している（武田他1953）。
 21. 千葉県市川市姥山貝塚（後期） 堀之内式の甕棺が2例出土し、ともに（初生児骨）が収納されていた（水野1938）。
 22. 千葉県市川市曾谷貝塚（後期） （胎児骨）1体分を包蔵する、称名寺式の甕棺が1例出土した（杉原他1971）。
 23. 千葉県市川市権現原貝塚（後期） 堀之内I式の甕棺が2例出土した。第2号には1体分の幼児骨（2～5才ぐらい）が入れられていた。第1号も同様だろうという（杉原他1971）。
 24. 千葉県松戸市寒風貝塚（中期） 本貝塚の中期後半加曾利E I式を使用した大形甕棺は、過去にしばしば成人埋葬と誤解されていたが、これは（小児骨）埋葬の誤りである（平野・滝口1933、桜井・原1968）。
 25. 千葉県松戸市殿平賀貝塚（後期） 竪穴住居址の「南西部の壁に近い床を、長径53㎝、短径39㎝の小判形に切り、深さ32㎝の壙をつくり、口縁から底部まで3分の1あまり欠失した甕を、外面を、上にして拡底を掩うようにして伏せてあり、その下から小児の頭骨片と思われる直径2㎝の骨片と、歯が出土している」。使用されている土器は、後期堀之内I式である（村上1967）。入口床面下における埋甕風習の最初の実証的事実として、重要な位置を占めている報告である。一部にこれを甕被葬として甕棺としない意見があることも、付記しておく（八幡他1973）。
 26. 千葉県松戸市貝の花貝塚（後期） 人骨の認められる甕棺は6例あり、いずれも堀之内I式土器を用いている。M・Nが粉末化している以外は、Cが生後1年半の幼年、Fが新生児、Jが2カ月位の乳児、Lが新生児である。報告書中の記載は統一を欠くので、年令に関するかぎり第6章「埋葬」の記載を排し、小片保氏等人類学者執筆の第7章「人骨群」の記載に従う（八幡他

1973)。

27. 埼玉県岩槻市黒谷貝塚（前期） 黒浜式土器使用の甕棺中より、（乳児骨）が出土している（藤沢・久持1940、西村1956）。
28. 埼玉県入間市坂東山遺跡（後期） 熟年男性を再埋葬した、称名寺式土器使用の甕棺が1例出土している（谷井・小片他1973）。
29. 東京都大田区上池上貝塚（後期） 「子供は生後間も無いものであって掘之内式前期の壺の中に入れて埋葬して在った」（松岡1940）。
30. 神奈川県横浜市金沢区称名寺貝塚（後期） 佐野大和氏による報告が1例ある。掘之内I式土器を使用し、人骨については、「鈴木尚氏によれば生後約1年程の性別不明の乳児」と記されている（佐野1950）。
31. 愛知県渥美郡渥美町保美貝塚（時期？） 8例出土とあるのみで詳細不明（小金井1923）。
32. 愛知県渥美郡渥美町伊川津貝塚（晩期） 『伊川津貝塚』96頁の発掘人骨集計表によれば、13例の甕棺が出土しているが、報告例は少ない。年令の報告がみられるのは、1957年出土例のみで、10カ月位の死産児である。他の12例はすべて（小児骨）とある。発掘年次の例数は次の通り。1922年1、1936年9、1950年1、1957年1、1959年1（久永・鈴木他1972）。
33. 愛知県渥美郡田原町吉胡貝塚（晩期） 清野謙次氏発掘甕棺は、小人骨をいれた35例の他に焼けた成人骨をいれた例が2例ある（清野1949、1969）。小人骨は運送中に細片化し、それをまぬがれた4例のみが報告されている。402号は満6才位の男性、381号は満5～6才位の男性、504号では満6～7才位の女性、286号は満4～5才位の男性と推定される。他はこれらより若いものであったろう（真岡1942）。文化財保護委員会の発掘では7例出土した。第1・3号は乳児骨、第2号は3～4才の幼児骨、第6号も幼児骨、第5・7号は成人骨で、第5号は男らしい。第4号は壮年の成人骨と10～12才の小児骨との合葬例である。この成人骨の性別は不明で、風習的抜歯はみられない（文化財1952）。
34. 愛知県豊橋市五貫森貝塚（晩期） 横たえられた合口甕棺のなかから、（小児）と思われる程度の人骨が出土していると記されているが、詳細不明。晩期終末（岡本1956）。
35. 愛知県豊橋市稲荷山貝塚（晩期） 清野謙次氏発掘例である。清野1949では5例とあるが、清野1969では6例である。いずれも乳児骨が入っていた。
36. 愛知県刈谷市本刈谷貝塚（晩期） 4例出土している。1969年発掘の3例は、いずれも人骨は小破片で年令不明。1952年発見例は、再埋葬（成人）骨である（加藤他1972）。
37. 岡山県笠岡市津雲貝塚（晩期） 晩期前半の甕棺が2例出土している。1は大串菊太郎氏発掘例で生後間もない乳児（大串1920）、2は清野謙次氏発掘例で乳児骨が収納してあった（清野他1920）。
38. 福岡県京都郡荏田町浄土院遺跡（後期） 西平式土器使用甕棺中より、火葬された成人女性骨が出土している（小田・内藤他1972）。

3 人骨の年令と性別

以上38遺跡出土の約140例の甕棺人骨のうち、年令・性別に関して形質人類学的報告、ないし人類学者による記載の行なわれているのは、約40例にすぎず、全体の70%については正確な資料が提示されていない。なかには概報に引続き近い将来に、本報告において報告される予定の例もある。

またその多くがいわゆる乳児や幼児であろうとも推定されるが、しかしこれには厳密さが要請される。理由としては、縄文人の生活史(ライフ・ヒストリー)を理解する上に、正しい年令構成とそれに関連する埋葬観念を復原し、それに投影している社会形態を追求しなければならない、と考えるからである。

70%の不正確な資料の再検討を痛感し、早くも本稿が一举には完成しないことを思い知らされたのであるが、一応現時点での年令と性別に関する検討を行なってみよう。

甕棺中の人骨は、ほとんどが単独埋葬によるものであるが、ごく稀に合葬例がある。

合葬例は今日まで、愛知県胡吉貝塚における1例(文化財4号)のみであり、中山英司氏は壮年と10~12才の小児と報告している。

他はすべて単独埋葬である。この被葬者の年令階級を、死産児(早産児)、乳児(1~2才)、幼児(3~7才)、小児、成人と大別すると、次のようになる。

A、死産児ないしは生後間もなく死亡した新生児骨などの収納例

死産児や新生児の例は、長谷部言人氏によって、岩手県大洞貝塚の6例、同中沢浜貝塚の1例、宮城県沼津貝塚の3例が報告されている。千葉県貝の花貝塚のF・L・J号、愛知県伊川津貝塚中の1例、岡山県津雲貝塚における大串例も同様である。人類学的報告のない青森県蟹沢遺跡・千葉県會谷貝塚・東京都上地上貝塚の各1例、千葉県姥山貝塚の2例も同様と考えられる。

B、1~2才の乳児骨収納の例

千葉県貝の花貝塚C号の1年半の幼児、神奈川県称名寺貝塚の類例、愛知県吉胡貝塚における文化財1・3号、同稲荷山貝塚における6例、岡山県津雲貝塚における清野例などが、人類学的報告ないし人類学者による記載のみられる例である。埼玉県黒谷貝塚例も同様であろう。千葉県六通貝塚も、用語の意図するところを推察して本類にいらておこう。

C、3~7才の幼児骨の収納した例

人類学的報告のみられるのは、愛知県吉胡貝塚の6例のみである。文化財2・6号は3~4才、清野4例は4~5才・男、5~6才・男、6才・男、6~7才・女である。性別の報告もこれらのみであり、男がやや多いが少数であり、最低両性に及ぶ点のみを確認しておく。

C'、これに対し人類学的な確認が行なわれないうちに、幼児骨とした例は非常に多い。これらには、乳幼児骨という場合もあるように、A・Bの場合も相当含まれていることが予測される。青森県平貝塚・岩手県細浦貝塚・福島県三貫地貝塚(2例)・茨城県福田貝塚・同東栗山貝塚・千葉県祇園貝塚(2例)・同築地台貝塚・同台門貝塚・同権現原貝塚などの例である。また愛知県吉胡貝塚における清野氏発掘37例中6例を除いた31例も、本類に含めておく。清野氏自身このうちの半数は、長谷部氏の胎児骨位と記している。

D、小児骨を収納した例

岩手県中沢浜貝塚・千葉県矢作貝塚・同寒風貝塚・愛知県伊川津貝塚（12例）・同五貫森貝塚例などが小児骨と記されている例であるが、いずれも人類学的な報告はない。中沢浜貝塚例は乳児～幼児と推定されるが、他の例も同様な疑いが強い。

E、成人骨を収納した例

青森県堀合遺跡例は成人男性、同表館遺跡例は18～19才女性、埼玉県坂東山遺跡は熟年男性、福岡県浄土院遺跡は成人女性、及び愛知県吉胡貝塚における4例が、人類学者の検討を経たものである。他に青森県天狗岱遺跡、同山野峠遺跡（5例）、愛知県刈元谷貝塚中の1例なども、成人と記されている。性別の偏よりはみられない。

以上合葬の1例を除くと、少なくともA・19例、B・13例、C・6例、C'・43例、D・17例、及びE・15例である。最も人類学的な研究の遅れているC'が、多数を占めているのは問題が多い。これらは生長の段階に伴った日常語でいえば、Aは死んで生まれた子供、ないし生後間もなく死んだ子供であり、Bは赤ん坊、Cは幼児、Dは学童、Eは大人であって、C'はA～Cを含む。子供に比して大人の例が少ない。かつ埋葬法も異なっている。

4 甕棺の形態と法量

甕棺の形態は伝統的に、単甕棺と合口甕棺とに分類されている。しかし合口甕棺には、2個の土器を合わせることによって法量を増したもの（A類）と、単に蓋として他の土器を使用したもの（B類）とがある。本稿では一応概念の混乱を避けるため、従来の分類に従い、両者を合口甕棺としておく。合口甕棺B類において蓋として利用された土器は、単甕棺の石蓋（a）・土器などによる蓋（b）などこそ同列に扱われるべきものである。腐朽したかもしれない蓋についても、甕棺内の土層の観察などから、推測の手がかりを求める必要がある。

単甕棺は、口縁部を上に向けた正位のA類と、その逆の逆位のB類とに分類される。若干斜位を呈するものも、便宜上この両類中に分類しておく。

単甕棺A類

a、青森県天狗岱遺跡例は、石蓋を有し、さらにその上に約5、60コの石堆がみられた。そして主体となる内甕を、あたかも外甕のように大破片が掩い、中間には粘土と石が詰めてあった。大きさは、高サ1尺5寸、胴径1尺1寸5分、底径6寸と記され、口頸部のややくびれた深鉢である。同蟹沢遺跡例も石蓋を有し、深鉢であるが、計測値は報告されていない。愛知県吉胡貝塚における文化財2号例も石蓋を有するが、計測値は報告されていない。

b、青森県表館遺跡例は、天狗岱遺跡と同様に口頸部のややくびれた深鉢で、高さ66cm、口径21cm、底径18cm、最大周約150cmである。大形破片で蓋をしてあった。

c、b・aと異なり無機質の蓋を有していない例。青森県山野峠遺跡の5例は、人骨を伴わない他の甕棺とともに、1～3コずつ石棺内に収められていた。計測値なし。形態は口頸部のややくびれた深鉢である。同月見野遺跡例も山野峠遺跡同様の、石棺内より出土したらしい。高さ55.5cm、

口径18cmである。胴径記載なし。同堀合遺跡例も同様な遺構より出土したらしい。江坂1968には2例報告されているが、どちらに人骨の出土がみ

られたかは記されていない。1は高さ56.5cm、胴部最大径47cm、2は高さ54.5cmである。

大洞貝塚の6例は特に明記されていないが、逆位ではなかったらしい。その計測値は長谷部1927に、第1表のように報告されている。

茨城県福田貝塚例は、計測値は未報告である。底部及び口縁部を大きく欠失した深鉢である。同東栗山貝塚も底部を欠く深鉢であるが、計測値は記載されていない。

千葉県矢作貝塚例は、底部を欠く深鉢で、口径25.8cm、現存底辺部径15cm、現存高35cmである。同姥山貝塚例は逆位ではないらしいが、形態・計測値の記載なし。同會谷貝塚例は深鉢で、高さ31.4cm、同権原貝塚例も深鉢で、口径約40cm、全高60cmである。

千葉県貝の花貝塚の6例は、いずれも深鉢で、計測値は次のとおり。C号（高さ43cm×口径34cm）、F号（36×27）、J号（42×推定35）、L号（54×31）、M号（推定41×推定36）。

埼玉県坂東山遺跡例は、高さ71.5cm、口径43cmの深鉢である。

神奈川県称名寺貝塚例は、高さ47.5cm、口径31.5～34.5cmの深鉢である。

第1表 大洞貝塚壺棺の計測値

	高 径	最大横径	口 径	底 径
A地点 1号	41cm	35	31	10
“ 2号	26	25	23	9
B地点 2号	35	29	38	9
5号	(現存部 30)	37	37	—
9号	38	30	29	9
10号	39	32	31	8

第2表 吉胡貝塚壺棺の計測値（第1種）

番号	口 径	胴 径	高 さ	底 径
278	15.6	16.0	8. 以上	不明
338	9.6	口径以下	12.5	2.0
339	10.6	10.8	8.2以上	不明
340	9.4	9.6	8. 以上	不明
346	10.6	10.6	8. 以上	不明
373	13.2	13.6	6. 以上	不明
377	10.0	10.4	9. 以上	不明
381	13.2	13.8	17.0	1.4
394	10.8	11.1	9.5以上	不明
402	12.0	14.0	13. 以上	不明
405	10.5	口径以下	6.5	不明
448	12.6	口径以下	12.0	1.6
451	10.0	口径以下	9.0	1.8
465	11.2	12.8	9. 以上	不明
468	13.4	9.5以上	9.5以上	不明
484	9.2	5.5以上	5.5以上	不明
494	13.2	11.8以上	11.8以上	不明
511	12.5	12.5以上	12.5以上	不明
521	11.2	14.0	14.0	2.3
522	9.4	5.8以上	5.8以上	不明
532	9.2	5. 以上	5. 以上	不明
551	12.0	13.4	13.4	不明

第3表 吉胡貝塚壺棺の計測値（第2種）

番号	口 径	胴 径	高 さ	底 径
267	8.8	8.6	9. 以上	不明
292	10.0	9.8	9. 以上	不明
317	9.4	11.4	10. 以上	不明
320	12.7	12.4	3. 以上	不明
323	11.2	8.2	9. 以上	不明
365	12.8	18.2	7.5以上	不明
393	11.4	11.9	4. 以上	不明
397	11.4	11.7	9.0以上	不明
473	15.2	15.8	19.0	2.0
507	12.0	13.0	5. 以上	不明
529	10.7	10.5	8.5以上	不明
554	7.5	6.6	3.8以上	不明
559	7.5	7.4	8.5以上	3.4

愛知県伊川津貝塚の13例中、写真などにより本類に属すと推定されるのは8例あるが、未報告である。他の5例は、1例が合口壺棺であることを除いては、単壺棺・合口壺棺の区別も不明である。

愛知県吉胡貝塚例について、清野1947は第1

種・頸部形成明らかならざる深鉢、第2種・同明らかな深鉢とに大別し、計測値を第2・3表のように報告している（単位寸）。

文化財保護委員会発掘の吉胡貝塚の7例は、いずれも計測値の報告がない。いずれも深鉢であるが、第6号は壺とみなされ、実測図より、現存高約29cm、胴径約31cmと推定される。愛知

県稲荷山貝塚例は、いずれも深鉢で、清野1949では計測値を第4表のように報告している（単位寸）。

ただし、清野氏報告の稲荷山及び吉胡例については、高さなど現存値と底部欠失による高さの区別ができていない。径底の記載のある例のみを最低確実な資料としておきたい。特に吉胡の例は多数を占めているので、再検討が強く望まれる。

岡山県津雲貝塚における清野氏発掘例は、高さ1尺2寸5分、口径1尺2寸である。

福岡県浄土院遺跡例は、実測図によれば口径約39cm、高さ約38cmの深鉢である。

単甕棺B類

3例みられる。第1は岩手県中沢浜貝塚例であるが、形態・計測値ともに不明である。第2は千葉県寒風貝塚例で、高さ2尺、口径1尺6寸5分の深鉢である。第3は同殿平賀貝塚例で、胴部の膨らんだ無頸の深鉢で、高さ28cm、胴径38cm、口径26cmである。

合口甕棺A類

愛知県五貫森貝塚の1例のみが記されているが、詳細は不明。

合口甕棺B類

3例知られている。青森県平貝塚例は、深鉢形土器を蓋にした壺で、口径30cm、最大巾49cm、高さ55cmである。岩手県金田一川遺跡例は、鉢形土器を蓋とした壺で、実測図によれば、口径約20cm、最大巾約48cm、高さ約61cmである。愛知県伊川津貝塚例は鉢形土器を蓋にした深鉢で、実測図によれば口径約22cm、最大巾約30cm、高さ約36cmである。

以上に記したように、単甕棺A類は84例、同B類は3例、合口甕棺A類は1例、同B類は3例みられる。単甕棺A類が大多数を占める。また全体の約35%を占める不明の他の甕棺も、大多数は単甕棺A類と推定される。

次にこれらの分類と、前部における年齢階級との関係の対比できる資料数を表示すると、次のようになる。

第5表 甕棺の形態と年齢階級

形態	年齢	A	B	C	C'	D	E	D+E	計
単甕棺	A	14	10	6	33	13	10	1	87
"	B					2			2
合口甕棺	A				1				1
"	B					1			1

大多数を占める単甕棺A類は、全階級に及んでいる。これに対し他の3類はC'・Dに偏ぶるかの観を示すが、まず絶対数が不足していること、形質人類学的研究が不十分な資料のみで

第4表 稲荷山貝塚甕棺の計測値

番号	口径	胴径	高さ	底径
215	11,8	12,8	12,4	2,0
216	11,3	9,2	7,5以上	不明
219	10,5	11,1	13,8	2,6
243	11,0	口径以内	10. 以上	不明
250	14,6	14,4	18,3	2,1

あることから、過大評価はできないのである。一応甕棺の形態と年令とは無関係とみなされる。

しかしながら合口甕棺A類についてのみは、検討を要する。本項のはじめに記したように、合口甕棺A類は、単甕棺及び合口甕棺B類と異なった意図が秘められていると考えられる。不十分な資料であるが、成人骨を出したとする愛知県一宮市馬見塚の報告例の存することも注意しておきたい(森1931)。

前項で指摘した年令の検討の不十分さに加え、甕棺自体の形態学的研究もきわめて不十分なものがあり、結局その法量、それも高さだけに限定しても、年令との関係を検討できる例は、26例しかない。全体の20%弱である。それらを表示すると、次のようになる。

第6表 甕棺の大きさと年令の関係

高さ 年令	21~30	31~40	41~50	51~60	61~70	71~80
A	1	5	2	1		
B		2	3	1		
C				1		
C'				1	1	
D	1				1	
E			1	2	1	1

これによれば、成人骨(E)を収納した甕棺は、他よりもやや大型の傾向を示すものの、大部分は小児以下と重複していることが判明する。すなわち甕棺の大きさのみで、収納人骨の年令を推定することは、不可能と判断される。特に九州地方の場合にみられるところの、後・晩期の甕棺と弥生時代の甕棺とを連結させる論拠は、きわめて説得力の乏しいものと断ぜざるを得ない。

補記 以上のさゝやかな検討を経ただけでも、甕棺に関する基本的な資料は全く不備であることは明白である。基礎的資料の整備を行なうために、さらにその基礎的資料を再検討せねばならない止儀となった次第である。目次に予定を記したこれから先の問題については、止むを得ず他日を期したい。

しかしこれらの限定された資料からだけみても、縄文・弥生両時代の甕棺を、安直に系統的に結びつけることの危険性は明らかであろう。

分布上の見通しとして、死産児～小児及び二次埋葬の成人葬は、いずれも埋甕風習と密接な関係を有するものであり、九州の場合でも例外ではないと考えていることも付記しておく。

引用文献目録

- 伊藤和夫, 1959: 千葉県 of 石器時代文化。千葉県石器時代遺跡地名表, 37~72頁。千葉。
- 江坂輝弥, 1960: 三戸郡名川町大字平小字前ノ沢出土の合口かめ棺について。奥南史苑, 4.18~21頁。八戸。
- , 1968: 縄文土器文化後期における改葬甕棺墓の研究。北奥古代文化, 1.3~7頁。東京。
- , 笹津備洋・西村正衛, 1958: 青森県三戸郡大館村蟹沢遺跡調査報告。石器時代, 5.1~18頁。東京。
- 大串菊太郎, 1920: 津雲貝塚及国府石器時代遺跡に対する二三の私見。民族と歴史, 3-4.1~34頁。東京。
- 小片 保・森本岩太郎・江坂輝弥, 1971: 青森県表館発見の縄文文化後期初頭の甕棺と人骨。考古学ジャーナル, 63.7~8頁。東京。
- 小田富士雄・内藤芳篤・他, 1972: 福岡県京都郡苅田町浄土院遺跡調査概報。福岡県苅田町。

- 岡本 勇, (1956): 埋葬。日本考古学講座, 3—縄文文化, 321~338頁。東京。
- 笠井新也, (1918): 陸奥国発見の石器時代墳墓に就いて。考古学雑誌, 9—1. 1~21頁。東京。
- 加藤岩蔵・他, (1972): 本刈谷貝塚。刈谷。
- 亀沢 磐, (1958): 福岡町の金田一川遺跡。岩手史学研究, 29. 58~62頁。盛岡。
- 喜田貞吉, (1934): 青森県出土洗骨入土器。歴史地理, 63—6。
- 清野謙次, (1949): 古代人骨の研究に基づく日本人種論。東京。
- , (1969): 日本貝塚の研究。東京。
- ・島田貞彦・梅原末治, (1920): 備中国郡大島村津雲貝塚発掘報告。京都帝国大学文学部考古学研究報告, 5. 1~63頁。京都。
- 久保常晴, (1955): 千葉県千葉郡築地台貝塚。日本考古学年報, 3. 48頁。東京。
- 小金井良精, (1923): 日本石器時代の埋葬状態。人類学雑誌, 38—1。東京。
- 坂詰秀一, (1961): 日本石器時代墳墓の類型学的研究。日本考古学研究, 17~67頁。東京。
- 桜井清彦・原信之, (1968): 神奈川県伊勢原町横手原出土の底部穿孔土器について。考古学雑誌, 54—2. 24~33頁。東京。
- 佐野大和, (1950): 横浜市金沢町出土の石器時代乳児甕棺。古代研究, 1. 24~25頁。東京。
- 杉原荘介・戸沢充則・他, (1971): 市川市史, 1。市川。
- 武田宗久, (1938): 下総国矢作貝塚発掘報告。考古学, 9—8. 371~395頁。東京。
- ・他, (1953): 千葉市誌。千葉。
- 谷井 彪・小片保・他, (1973): 坂東山。浦和。
- 角田文衛, (1939): 常陸県栗山遺跡調査概報。人類学雑誌, 54—9. 1~37頁。東京。
- 西村正衛, (1956): 信仰。日本考古学講座, 3—縄文文化, 301~320頁。東京。
- 長谷部言人, (1925): 陸前大洞貝塚発掘調査所見。人類学雑誌, 40—10. 349~360頁。東京。
- , (1927): 石器時代の死産児甕葬。人類学雑誌, 42—8. 309~315頁。東京。
- 久永春男・鈴木尚・他, (1972): 伊川津貝塚。愛知県渥美町。
- 平野元三郎・滝口宏, (1933): 下総高木村寒風発見の人骨。ドルメン, 2—7. 5~7頁。東京。
- ・他, (1970): 祇園貝塚発掘調査概報。千葉。
- 藤沢宗平・久持恒雄, (1940): 埼玉県黒谷貝塚発掘概報。史観, 24. 93~106頁。東京。
- 真岡亀四郎, (1942): 三河国渥美郡吉胡貝塚ニ於テ発掘セラレタル甕棺内ノ小児骨ニ就テ。京都医学雑誌, 39—6. 90~101頁。京都。
- 松岡六郎, (1940): 上地上貝塚略報1。貝塚, 21, 1~2頁。東京。
- 水野 祐, (1938): 姥山貝塚発掘調査略報。史観, 17. 113~119頁。東京。
- 村上俊嗣, (1967): 松戸市殿平賀貝塚調査報告。考古学雑誌, 52—4. 56~70頁。東京。
- 森徳一郎, (1931): 尾張馬見塚甕棺群の真相。史蹟名勝天然記念物, 6—7. 32~43頁。東京。
- 八幡一郎・他, (1973): 貝の花貝塚。松戸。
- 渡辺 誠・片岡肇, (1972): 茨城県東村福田貝塚発掘調査概報。京都。
- 文化財保護委員会, (1952): 吉胡貝塚。東京。